

内藤銀次郎頼以○信濃 時獻上暑 信州寒晒蕎麥

〔嬉遊笑覽十上〕 軽口男といふ草子、淺草旅籠町の處弓手も馬手もそば切屋、一杯六文かけねなし。  
 むしそば切の根本と、聲々に呼びける、其繪をみると、棚のうへに、蒸籠むしそば切一膳七文とよ  
口男は、貞享中の草子、またこれは元祿三年の草子にて、其間程近ければ、前後あはす、さまで、八年の  
 ころの物といふ。流行物の短歌には、八文もりのけんどんやとあれば、前後あはす、さまで、八年の  
 ありしに延享二年草子、賢女心粋、玄だらく女をいふ處、集せんだし廿四文のそば切、小半酒を小  
 宿のか、まじりに呑て玄まひ、醉にまかせて、うどんやのけんどん箱を枕にして晝寐、これにて  
 も其價知べし、

〔一話一言十九〕 むし蕎麥の價

古き板本のはなし本に、江戸すゝめといふあり其中に、

けんどんは時の間の虫

淺草くわんおん寺内にのふありけるに、さぶらひとも見へず、中間らしきもの一人通りすは町  
 のあたりにて、せいろふむしそば切壹膳七文とよびける時に、此男腹もすきければ、よらばやと思  
 ひ、こしを見れば、錢わすか十四五文ならでなし、ことの外くたびれひだるくはなる、まづよら  
 ばやと思ひ、のれんの中に入よりはやくせんを出す、すきはらなれば口あたりのよきま、に、四  
 せんまでくひけり、そば切の代は貳十八文、こしには錢十四五文ならではなし、いかせんと思  
 ひけるが、じあんしてていしゆをよび、酒やあるととふ、いかにも御ざ候といふ、其儀ならば二十  
 四文計がの出し申されよといへば、そのまゝ持て来る、それをのみて後に一せんのそば切半分  
 くい残し、そばにやすてといふむし有けるを、わんの中に入ふたをしてていしゆをよびいひけ  
 るは、此あたりにはやすてといふ虫おほく有やととふ、ていしゆ聞いてなるほど大分御ざります  
 といふ、かのものいふ様、あれはことの外くさきものにて、どくなりといへば、ていしゆなるほど